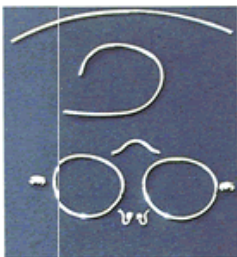




大まかな製造工程。線材から玉型の曲線に合わせて力をつけていく。鼻とパッドは部品調達しているが、その他すべて谷口さんの手仕事でつくられる。



トレンドのデザインフレームの仕事も多くなった。アンティークな一山(下)はどうしてもズレ落ちる傾向にあるが、その人の鼻の適正位置に合わせて作ってくれるから、ジャストフィット!



メガネという視力を補正するツールは、一人ひとりに合ったレンズ、フレームを選び、視力をチェックしてレンズをフレームに入れて完成する。それ故にメガネショップはメーカー的な性格を持っているとも言える。

技術の進歩はもちろんメガネ業界にも顕著に表れている。視力検査機器やレンズをカットする加工機などがそれに当たるが、システム化がもたらす恩恵の陰で、過信による落とし穴が待っていることもまた事実であろう。

三十年も昔の眼鏡店の現場は今ほど機械化が進んでいなかった。そこで従事する人たちは技術者というよりは職人に近い存在であった。フレームも決まったデザイン、サイズしか無い時代。職人たちはフロント部のリム半分をカットしてリムレスタイプにした

そんな職人気質を21世紀を迎えた今でも受け継ぐ業界人がいる。緑豊かな自然に囲まれた伊豆・大仁でメガネのタニグチを営む谷口晴俊さんだ。しかも谷口さんは、二次加工であった昔の職人に対し、限りなく完全オーダーメイドに近い形で、世界でたった一枚のメガネフレームを作ってくれる。メタルフレームをオーダーメイドするショップは全国広しといえども、谷口さん一人だけかもしれない。

メガネは年々ファッションアイテムの一つとして注目を集め、フレーム自体もバリエーション豊かなデザインがリリースされている。しかもインポート商品も花盛りで、幅広いウオントップに選ばれるようになった。でもファッションとして認められると次に来るのは、他人と同じものを身に着けたくないという欲求。でも谷口さん

は、おしゃれという観点からオーダーを始めたわけではない。それはメガネの本質を追究していくためだった。

オーダーを始めるきっかけは、ある時来店した小さな子供。その子供は三歳ぐらいで少し発音が遅れていて、小さい顔に合うフレームがなかった。また十年ほど前から悩みの種だった強度用のフレーム探しにも苦労させられていた。強度近視の人はレンズの光学中心に瞳孔が合うことが絶対条件。その当時は大型フレーム全盛だったから、フレームにレンズを合わせようとすると厚みが増し、しかも重くなって装着感も低下するからだ。

この現状を伝えフレームメーカーにも協力を求めたが、フレームは工業製品のため、生産ラインにのせるのは難しいという答え。フレーム製造の現場を見た経験もな

いのに、大胆にもフレームづくりを行うことを決意する。もともと谷口さんは畑違いとはいえない以前、時計の修理も行って、その腕は職人が集う技能オリンピックにも出場するほどの技量の持ち主。また趣味のナイフ製作やフライフイッシングに使う疑似餌も自作。メガネにおいてもロー付修理を自ら行う手先の器用さで、試行錯誤を繰り返しながら独学でものになしていく。

「初めの頃は使わなくなったお客様のメガネを使って、どちらかというと面白いメガネを作ってた。楽しんでいました。あり合わせの材料で作っていくうちに、ブリッジや玉型デザインを自由にセッティングできることは、機能的素晴らしいメガネができあがるということに気がきました」と話す。

「初めの頃は使わなくなったお客様のメガネを使って、どちらかというと面白いメガネを作ってた。楽しんでいました。あり合わせの材料で作っていくうちに、ブリッジや玉型デザインを自由にセッティングできることは、機能的素晴らしいメガネができあがるということに気がきました」と話す。

眼鏡には十分といえない。レンズの厚み、重量は改善されるが、レンズと瞳孔位置までカバーするものではない。そのズレはプリズム作用が働き目に負担をかけていくことになるからだ。

鼻にかかるパッドの高さを最適な位置にロー付すれば、上下位置が瞳孔と合い、また左右のリムをつなくブリッジの長さも合わせれば、瞳孔間距離もピッタリ合う。これが谷口さんが答をだしたメガネの機能



ネの機能を最大限に生かすテクニクだ。幸運にも取引先業者にメガネ産地福井より部品の仕入れルートを確認して本格的な販売をスタートした。

レンズのカーブに合わせてリムを描き、左右とも同じサイズに合わせるが、決して簡単な作業ではない。大がかりな設備もないから、表面処理は一枚一枚仕上げるが、粗めから段階的に細かな目をもつヤスリを使い分け丹念に磨いていく。もともと谷口さんは、「いまのところ十分な設備とはいえないませんが、現状でなんとかやっています。いい工具があればいまま上の仕上がりになるかも知れませんが、機械等を使うことでハンドメイドの良さが薄れるような気がして」と手作り感を大事にする。

オーダーメイドで作られるフレームは、テンブルと丁番部品を除きすべて手作り。通常のフレームでは智と呼ばれる箇所が割れ智となってレンズを留めているが、谷口さんが作るフレームは、リム自体を切り、そこにレンズ留めの部品をロー付する。強度を考へての手法という。

その掛けやすさと快適な視力が得られることから、口コミで広がり、昨年は約七十本をオーダー製作。強度の人以外も、自分の好みのデザインを描いて持参してくるユーザーも多くなり、機能とファッションという両方の声に答えて

メガネのタニグチ (伊豆・大仁、☎0558-76-0787) 谷口晴俊社長

